

中学校の部 優秀賞

四国防災八十八話 第83話 おそろしかった3日間

「父」と「私」の思いと僕

一本松中学校 1年 おおにし あきよし 大西 輝佳

「どうせ死ぬんやったら、ぐっすり寝てなんにもわからずに死にたい、苦しみの中で死にたくない。」一災害後、死を覚悟したときの父親の言葉です。自分たちができることはすべてやった、もうできることはないという状況に置かれたとき、こんなことを考えるのかと、強く印象付けられた言葉です。けれど、この言葉は、単に自分が苦しみたくないからというのではなく、一緒に避難した二人の子どもたちを思う気持ちの表れだと僕には思えました。本当は命の限り生きさせて、幸せな生活を送らせたい、数えきれないくらいの経験をさせたいのにできそうにない、だったら、せめて苦しませたくないという強い思いを感じました。

僕が経験した災害で最も大きかったのは、西日本豪雨です。家の近くでは土砂崩れが発生し、山の麓の方では、川が氾濫し、床上・床下浸水しているところもありました。自然の力のすさまじさを実感させられた経験でした。

このときのことを教訓に、僕は、いつ起きるか分からない自然災害に備えて、事前の準備をしています。その一つとして、寝る場所や玄関の近くに防災バッグを置いています。中学校に消防署の方がいらっしゃったとき、防災バッグの中身、どんなものを入れていくのがよいかを話してくださいました。僕は、家に帰るとその日のうちに家族全員で話しながら、中身の見直しをしました。防災に必要な話を聞いても、実行しなければ役に立たないことを僕自身、よく分かっていたからです。もう一つの防災対策は、情報の収集です。ITの発展が著しい現代だからこそできる防災対策だと思います。だから、僕は、地震や台風などの災害情報を意識して生活しています。

僕は、この話を読んで、防災に大切なのは、日々の準備と生きることへの執着心だと考えるようになりました。この話でも、多くの人々が諦めるなかで、ずっと「死にたくない」と、生きること、生きられることに望みをかけていた「私」がいました。「私」の思いは通じ、助かりました。僕も、どんな状況の中でも、生きることが諦めたくはありません。僕は、命は、どれだけ強く生きようと思いつけるか、そして、そのためにどれだけ力を尽くすかで守られると信じて生きていきます。